

第17回 座・高円寺  
ドキュメンタリーフェスティバル  
コンペティション部門 入賞

山形国際ドキュメンタリー映画祭  
2025  
ともにある Cinema with Us

震災で家を失って、人生が動き出した。

# 三角屋の

# 交差点で

*At the Triangle Intersection*

老い、介護、役割の喪失。  
原発事故で帰れなくなった99歳の母と息子夫婦の、3年間の記録。

監督・撮影：山田徹

「三角屋の交差点で」プロデューサー：加藤成子 編集：PHAM Thi Hao 山田徹 整音：川上拓也 デザイン：北野亜弓 (calamar LLC) 製作・配給：インプレオ  
2025年 | 日本 | 95分 | 5.1ch | DCP ©Toru Yamada / IMPLEO Inc. sankakuya-film.jp

英語字幕付き上映 Screening with English Subtitles

# 震災の先で選ぶ直す。家を、「私」を。



## STORY

2011年の東日本大震災と福島第一原発事故から7年。浪江町からの避難を余儀なくされた一家は、故郷に戻るか、新たな生活を選ぶかの狭間で揺れていた。震災を機に長年の仕事を手放し、いわき市の災害公営住宅で暮らすなかで、家族の役割や関係性も静かに変化していく。

99歳の母テツは、記憶が薄れゆくなかでも、生まれ故郷・大熊町への想いを離さない。寡黙な息子タケマサは母を敬いながらも、介護の多くを妻シゲコに委ねている。役割を担い続けてきたシゲコは、家族のなかで当然とされてきた立場や、自身の生き方を見つめ直し始める。

土地を失ったあと、家族はどこへ向かうのか。役割が揺らいだとき、人は何を抛り所に生きていくのか。

本作は、揺らぎのなかにある一家の日常を通して、「家」とは何か、「私」とは何かを静かに問いかける。

## 監督の問いのはじまり

山田徹監督は、これまで福島をフィールドに映像制作を続けてきた。前作『新地町の漁師たち』(2016)では、海と土地に根ざし、生業を継ごうとする人々を撮影してきた。本作が向き合うのは、震災によって土地や役割を失いながらも、その喪失をはっきりと言葉にできないまま生きる家族である。震災後を生きるとはどういうことか。自由は、どこまで祝福で、どこから不安に変わるのか。その問いは、やがて私たち自身の足元へと広がっていく。

家も家業も失って  
あっ、なんか自由になって。  
スキップでも  
したくなるなって

認知機能が衰える中、  
鮮明になる思いは一つ  
大熊町の生家に  
帰りたい...

家も家業も失って  
家督息子の俺は  
日々何する？  
母親の老いる姿には  
目を背けていたい



シゲコ(75)



テツ(99)

タケマサ(75)

作品概要  
English Synopsis



4月4日(土)よりロードショー  
フォーラム福島ほか全国順次公開 全国共通特別鑑賞券  
1,500円



ポレポレ東中野

03 3371 0088 pole2.co.jp  
JR東中野駅西口改札北側出口より徒歩1分  
都営大江戸線A1出口より徒歩1分